

演 題	老健の役割ってなんだろう？
副 題	在宅生活支援・在宅復帰推進への 取り組み経過から

フリガナ	カゴロウジンホケンシツ	フルリールカワ
施 設 名	介護老人保健施設	フルリールむかわ
フリガナ	シエンソウダシヨウ	サカモトヨシヒロ
発表者(職名・氏名)	支援相談員	坂本佳優
フリガナ	シヨクインイチドウ	
共同研究者	職員一同	

【はじめに】

来たる超高齢化社会、人口減少社会に備え地域包括ケアシステムの構築が急がれる中、介護老人保健施設（以下老健）に求められる役割も大きく変わってきている。当施設においては特別養護老人ホーム待機での利用者が年々増加傾向にある。

地域包括ケアシステムの中核として老健本来の役割を果たすため、当施設では「在宅支援」の機能強化を目指し取り組みを行っている。

今回、全老健にて推奨される「R4システム」を活用し、老健の役割の再考と情報共有につながったので導入の経過と結果を報告する。

【方法】

○R4システム導入前の意識調査アンケート

H28年10月24日

『老健の役割について・多職種間の情報共有について・利用者について・R4の理解について』

○R4システム導入後の意識調査アンケート

H29年 6月 6日

『老健の役割について・多職種間の情報共有について・利用者について・R4の理解について』

○H28年10月～H29年7月までの在宅復帰率とベッド回転率の調査と前年度の比較

○内部研修（在宅支援推進について・R4システムについて）

【結果】

まず、当施設で「在宅支援」を取り組むために施設職員への研修を行った。そして、改めて老健の役割を理解して「在宅支援」の意識付けを全職員に行った。その際に、現状の職員の意識に関してアンケートを行った。その結果、利用者の状態や方向性についてのアンケート項目が全体的に把握できているとの回答が多く。逆にできていないと回答された項目には多職種間の情報共有、そしてR4についての項目が多数を占めた。

その後、施設にてR4システムをH28年12月に導入。「在宅支援」を行っていくために職員へ研修を行い、H29年1月からは利用者のアセスメント

に関してもR4システムに沿った方法を行った。

そして、導入後のアンケートを行い、結果を見るとほぼ全体の質問項目に向上がみられた。大きく差が現れたのは情報共有とR4についての項目だった。

そして、在宅復帰率に関しては前年度よりも在宅復帰率の上昇が見られた。現状は在宅復帰率が上昇傾向であった。

一方で、ベッド回転率に関してはR4導入前に季節的な利用者の落ち込みから横ばい状況が続いており、回復には至っていないものの、若干の上昇傾向はみられている。

【まとめ】

アンケートの結果からR4システムを導入したことにより、多職種間の情報共有が行いやすくなった。情報共有が円滑になることで在宅復帰を目的とする利用者のニーズを把握し、在宅に向けたより『具体的なケア』を行うことが出来た。前年度データからの向上が見られたのはそういった情報共有の成果が現れたのではないだろうか。

しかし、今回の取り組みですべてが向上につながったわけではない。ベッドの稼働率が横ばい状態にあり、「在宅支援」を行っていくがリピーターの増加につなげることができなかつたと考える。地域包括ケアシステムの中核として在宅後もリハビリを提供できるショートステイやデイケアのサービスの活用をしてもらい、居宅での生活を支援する。そして、必要な際は入所していただき、集中的なリハビリを行うことで「在宅支援」を行う。そういったリピーターが必要と感じた。老健に入所して在宅へ戻ることが終わりではなく、「在宅支援」として、今後は一人一人の利用者と長期にわたる関わりを持っていきたい。

今回の取り組みを通して、「在宅支援」の機能強化という目標に向けての第一歩を踏み出すことが出来た。この積み重ねが老健本来の役割を果たすためになると考え、施設職員一同で継続して取り組んでいきたい。